

空



2007年

SORA 20号

晴夜 (20) | 3

柴田 佐知子

はばからぬ色にまみれし毒茸

身にしむや家路が闇の家に尽き

柿をむく耳納連山思ひつつ

大黒柱厨の柱冬が来る

島の端はどこも波立つ十二月

壺に余りし骨の行方や冬銀河

焚火より抜けて大きな日暮かな

初湯して悔いあらたむる齡でもなし

水音

苑 実 耶

電線の雀稲田にまつ逆さま

おしなべて寺にいてふや朝倉路

くづれ築水音大きくなりにつけり

秋風や杖を恃みて汀まで

朝より全き空や冬の鳶

冬帽子開頭手術に贈りけり

叫びたくなるほど蒼し冬の海

日本中に銀座がありて冬うらら

母と居て父の思ひ出冬日向

寝入りたる夫を炬燵に残しておく

雛の市抜け膺乳房あつらへに

高千夏子

俳句を始めて間がない頃、省略の効いた俳句はなかなか理解が及ばず、字面だけを追っていたような気がする。そのような時、千夏子さんの「雛の市」の句を見て、病気もこのような俳句になることを知った。

それまでは作品の印象から、高千夏子さんは背筋を伸ばして凛と立ち、自分にも厳しい人だろうと近づきがたく思っていた。しかし乳房を失っても眼をそらすことなく、冷静に俳句を詠み続けられる千夏子さんを、癌経験者として身近に感じた。

昨年、四カ月入院した時、人からは「長かったね」と言われたが、そう思っていない私が居た。私には俳句があった。病室の窓から見る空、雲、夕焼、月、そして風に季節の移ろいを感じた。俳句の材料には事欠かなかった。

高千夏子さんの句には、遠く及ばないが、病気と向い合って作句できたと思う。これからも私には俳句がある。

満月

高倉恵美子

通院の道に花種盗みけり
種蒔きし端に埋めおく種袋
鳥除けの網にかかりし蛇二匹
この暑さ泥田這ひたるごときかな
飽食も冷房も慣れ終戦日
朝顔や今も大事に子の日記
黒雲にのりて満月上がりけり
コスモスに隠れて何も見えざりし
藁焼きの煙の行方定まらず
葎草赤し葱苗揃ひ立つ

「野菜が見事に太っていますね」と道行く人たちから声を掛けられる。我が家の畑はすぐ横に用水があり十分に散水出来たが、用水から離れた畑の人にとって今年の夏は大変だったようだ。大根や白菜を蒔いた時期には用水から一輪車でバケツに入れた水を運んでいた。しかし、用水の水落としが済んだ後は水を止めてしまうので、家からベッドボトルで水を運ぶ。毎日、夕方になると自転車の前後に何本ものベッドボトルを乗せて運んでいた。野菜作りは老人が多く、水を運ぶのも重労働である。そのせいか冬野菜を今年は諦めたと言う人が多い。

我が家の畑もいつもの年より手をかけた割には育ちは遅いがまずまずの出来だ。最近は大根、白菜、ほうれん草など近所にせっせと運んでいる。

一葉

樋口みのぶ

地芝居の悪党声を張りどほし

熟考の端に大きく一葉落つ

達筆の荷札をつけて今年米

大花野抜けて睡魔に襲はるる

夕焼のなかより吾子の戻りきし

病床に母の日々過ぐ花八つ手

病む母の手のどこまでも冷えてをり

かたまりし鴨にふくるる河口かな

幸せな話ばかりよ日向ぼこ

雨音のふいに高まる炬燵かな

母との会話が成立しなくなつて数年経つ。施設のお世話になつて久しいのだが、会話というより私がただ独り言のように話すばかりであつた。

ある時母の爪が伸びているのが気になつた。眼鏡を持つていつていなかつたのだが、仕方なく爪を切り始めたら、「イタイ」と言つたのである。エツと思わず口に出してしまつた。母には感情は残つている。口に出せなかつただけなのだ。一瞬体が熱くなつた。一方通行ではなかつたのだと嬉しかつた。

今日も母に、コスモス畑で花粉まみれになつて花を摘んだこと、庭の金木犀が匂いはじめたこと、母の好きな猫のことなど話して帰つてきた。明日は何を話そうか。

林立

青山悠

鵲鳴くや村一番の高い木に
 星に棲む話あれこれ夜長かな
 馬小屋の更けし静寂や神無月
 坂鳥に霊峰肩をまるめけり
 蚯蚓鳴く観音さまに石の門
 大寺に足場大きく松手入
 下駄借りて停てば秋ゆく詩仙堂
 廃刊のしらせ一片秋深し
 舟繋ぐ杭の林立冬に入る
 玉眺たいちぎの不漁を託つ懐手

・びきのつるか面搔き・

流れを塞ぐようにびつしり咲いている溝蕎麦に遠い日のふるさとを懐かしく思い出した。金平糖や夜空にきらめく星の群が可愛らしい溝蕎麦に重なってくる。

福岡市に隣接したふるさとでは、蛙のことを「びき」と言い、子供達は「びきたん、びきたん」と追いかけたり、捉へてザリガニの餌にしていた。そして溝蕎麦のことを「びきの面搔き」とよんでいた。溝蕎麦は五十センチ内外で直立し、茎に逆棘がある。この棘が蛙の貌を引つ搔きそうだというので「びきの面搔き」と呼ぶようになったのだろうが、言い得て妙だと思っている。水辺に這い上がっていきなり棘にさされたのでは、蛙も憤懣やる方ないことだろう。

ほかにも多くのふるさとの言葉がある。きりぎりすを「ギツチヨン」梟を「とろすこ」など。方言は楽しい。